

[099] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10167>

出版情報：語文研究. 99, 2005-06-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

(會員著書紹介)

中野三敏 著

『近世新畸人伝』

畸人とは、『莊子』大宗師篇に「畸人は人に畸にして、而して天にひとし」と見えるように、天に等しい真人の意。さらに筆者によれば、「俗に居て俗に染まぬ賢者」の意であり、畸人の本領とは世をすねた真の人間性にあるという。

本書は宝曆(一七五一—六四)前後の江戸の学芸・文芸界において、この「畸人」と呼び得る五人を選び、伴蒿蹊『近世畸人伝』の拾遺を編むことを図つたものである。

自墮落先生(一七〇〇?)は俳人、井上蘭台(一七〇五

六一)は儒学者、伏山道人黙隠(一七〇二—七八)は篆刻家・僧侶、金龍道人敬雄(一七二二—八二)は漢詩人・僧侶、沢田東江(一七三二—九六)は儒学者・書家。

取り上げられた人物はいずれも一八世紀江戸文芸の特徴である「雅」と「俗」を併せ持った人々であり、それぞれ独自の個性を発揮しながらもどこかで微妙につながっている。筆者はいう、「林塾員長井上蘭台の薫陶をじかに受けたのが東江、伏山、東江であり、伏山の莫逆の友が敬雄であった。そして、この四人ともどこかで自墮落先生の奇行の噂を聞いて、それぞれに心中何がしか思うところがあつたはずである」

と。

筆者はこれまで一貫して、一八世紀こそが、中世以来の伝統文芸の「雅」と、近世に興つた俗文芸の「俗」とが最もバランスよく保たれた「雅俗融和」の時代であり、江戸文芸の最盛期であると主張してきた。本書の畸人たちも、そうした成熟した江戸文化の中から必然的に生まれ出てきた、いわば時代の申し子なのであり、各人の個性を縦軸として見ると同時に、彼らのつながりに着目し、その時代の横の広がりを中心に視野に収めることで、筆者は一八世紀という時代のあり方を鮮明に描いてみせているのである。

本書は、六五年より七三年にかけて『経済往来』『歴史と人物』などに掲載され、一九七七年に毎日新聞社から刊行された。ほぼ四十年ぶりの名著の復刊である。

(平成十六年十一月 岩波現代文庫 二六六頁 一一五五円)

久保田啓一・鈴木淳・揖斐高・鈴木亮 校注

『清水宗川聞書・梨本集・用心私記』

『歌論歌学集成』第十六巻にあたる本書は、近世前期の歌学・歌論書三編を収める。書名と校注者は以下の通り。

清水宗川聞書 久保田啓一

梨本集 鈴木淳

用心私記 揖斐高・鈴木亮

『清水宗川聞書』は、述者某が、清水宗川（一六一四—一六九七）の直話や、宗川を介在させての「二位殿」（飛鳥井雅章）の説、及び具体的な歌語の用法や解釈を記したもので、当時の歌壇事蹟や、和歌鑑賞のありようを窺う好資料である。

『梨本集』三巻は、江戸市中の隠士戸田茂睡（一六二九—一七〇六）の著作。制禁の詞を集成し、その各々について論評、制禁の根拠が謂われのないものであることを具体的に述べたものである。解題によれば、茂睡の批判の対象は、「当時、絶対的な権威を振るっていた堂上諸家」よりもむしろ、「二条派の地下歌人の頑迷さではなかつたか」という。しかも、その中でも最も標的として考えていたのが清水宗川あたりではないか、と言われれば、読者は思わず両者の本文を見比べ、その意見の相違を確かめたくなるだろう。この二書を併せ収録した所に、『集成』の構成の妙を感じる。

『用心私記』は、坂光淳が若い頃に和歌を学んだという烏丸光雄（一六四七—一六九〇）の教えを、晩年になって自分の意見を付け加えながらまとめた歌論書。重要な事柄を理解し易くするために、「ひそかに私の了簡を加へ」て書かれており、烏丸歌学の要点を簡潔に示した入門書となっている。

各々の書を繙けば、頭注に挙げられた膨大な歌集・歌論書の名とともに、果てしもない知識の集積にただただ圧倒され

る。和歌という営みは、本来、中古からの歴史の堆積より生み出されるものなのだという当たり前の事実、改めて思い至るのである。

解題では、各書の成立事情や論の性格のみならず、現在の研究状況にも触れており、学習の便に供している。近世歌論研究者必携の一冊と言えよう。

（平成十六年十二月 三弥井書店 A5判 二二八頁 七、五六〇円）

後藤昭雄 著

『平安朝漢文学論考 補訂版』

本書は、一九八一年に『平安朝漢文学論考』（桜楓社）として刊行された著者の第一論文集の二十三年ぶりの再刊である。構成は以下の通り。

はじめに

一 嵯峨朝詩壇

嵯峨天皇と弘仁期詩壇

『文華秀麗集』の位置

宮廷詩人と律令官人と——嵯峨朝文壇の基盤——

小野岑守小論

嵯峨朝詩人の表現——文学空間の創造——

二 菅原道真とその時代

「文人相軽」

大江音人——「在朝の通儒」——

忠臣・道真・長谷雄

菅原道真の「近院山水障子詩」をめぐって

紀長谷雄の「山家秋歌」について

大蔵善行七十賀詩宴について

藤原佐世

三 一条朝前後

桜島忠信落書について

一条朝詩壇と『本朝麗藻』

大江以言考

大江匡衡の詩文

大江匡房の「暮年詩記」について

四 詩人伝研究

「文華秀麗集詩人小伝」拾遺

古今集歌人における詩人的要素

「属文の王卿」——醍醐系皇親——

漢文学史上の親王

白河院の詩遊

敦道親王

学生がくせいの字なについて

あとがき

補訂版あとがき

索引

平安朝文学史において、漢文学の存在と、その多大なる影響力は、従来当然の如く指摘されてきたが、その具体相は実に曖昧たるものであった。本書では、そのような文学史上これまで充分に光を当てられてこなかった平安朝漢詩文の全貌に迫る。本書「あとがき」に示す「大江匡房の「我が朝は弘仁承和に起こり、貞観延喜に盛んに、承平天曆に中興し、長保寛弘に再び盛んなり」（『詩境記』）という史的跡づけ」を軸に、著者の、その綿密且つ徹底した史料調査に基づく明晰なる論は、本書を通して一貫している。

先に取り上げた大江匡房の指摘に見る四つの画期のうち、第一期・第二期・第四期の時期における漢詩文の内実を明らかにした、「一 嵯峨朝詩壇」「二 菅原道真とその時代」「三 一条朝前後」はもとより、「四 詩人伝研究」は、平安朝期における漢詩文の浸透の広範たるを、これまであまり重視されてこなかった作者層に目を向けた、実に事細かな労作といえる一章である。

補訂版となる本書は、各論に「追記」「補記」として前著刊行後に著者が発表した論文等を示し、また、訓読を改めたり、字句を整えるなどの補筆を多分に加える等、旧稿をより一層充実させた内容となっている。

尚、巻末には、人名索引・書名索引・事項索引が附せられており、文学研究者必携の書としてだけでなく、文学研究を志す者の良き手引書ともなること疑いない。

(平成十七年二月 勉誠出版 A5判 四七六頁 五、八八〇円)

白石良夫・湯浅佳子 校訂

『広益俗説弁続編』

井沢蟠竜『広益俗説弁』は、正徳五年(一七一五)刊行の正編二巻を皮切りとして、享保二年(一七一七)に後編・遺編各五巻、享保四年(一七一九)に附編七巻、享保十二年に残編八巻が相次いで公開されており、俗説弁物の集大成ともいえる作品であろう。各編とも神祇・天子・皇子・皇妃・公卿・土庶・婦女・僧道・人物補遺・近世・雑類等の分類からなり、日本古来の伝説・俗説に対して和漢の諸書を博引しつつ考証を加える。

本書は、正編を取り扱った白石良夫校訂『広益俗説弁』に続き、後編・遺編・附編・残編を翻刻しており、翻刻にあたっては国文学研究資料館所蔵本を底本として、忠実に再現したものである。冒頭には底本各編首巻の総目録が記載される。

従来、原書の思想的影響に関して、朱子学のみが論じられてきたが、巻末に附載された湯浅佳子の解説は、蟠竜の「神代、久しき事にあらず。なを今日の上にありて、其身、則神明と同一体」という言説をもとにして、神道が及ぼした影響をも指摘している。こうした視点から原書を読み解くことで、蟠竜の伝えようとした『広益俗説弁』の世界がより豊かに再現されることであろう。

(平成十七年二月 東洋文庫 四〇四頁 三、一五〇円)

船津正明 著

『国語科教育研究』

本書は、著者自身が「まえがき」において述べられているように、「中学校・高等学校の国語科教材を中心に据え、体系的に国語科教育の在り方を追求した」書である。前半部では、「国語科教育」の意義、本質、展望等、全体的な論を述べ、「国語教育論文編」と題した後半部では、「古文」を中心とした諸作品について、具体的な学習指導法等を述べた論文が十四編収められている。これは、「日本の古典教育は日本の「心」として国語教育の中心に据えるべき」とする著者の主張が反映された構成となっている。章立ては以下の通りで

ある。

序文 川添昭二

まえがき

- 一、国語科教育
 - 二、国語科教育と国語教育
 - 三、国語科教育の本質と意義
 - 四、国語科授業論
 - 五、学習指導案
 - 六、国語科教材研究論
 - 七、学習者論
 - 八、言語事項
 - 九、表現
 - 十、理解
 - 十一、国語科の評価
 - 十二、国語科教育の歴史(概要)
 - 十三、学習指導要領
 - 十四、国語科教師論
 - 十五、国語科教育の展望と課題
- 国語教育論文編
- 「猫」にみる人間形象をめぐる「猫の事務所」/
小説教材「こころ」について その学習指導からの一
考察 / 古典教育論 / 「徒然草」の学習指導について
「国語」教科書を中心として / 物語文学の学習指

導 竹取物語・伊勢物語を中心として / 日記文学の学
習指導 「土佐日記」・「更級日記」の場合 / 軍記物語
としての「平家物語」の学習指導 / 説話文学の学習指
導 「国語」教科書採録作品を中心として / 和歌
文学の学習指導 とくに三大歌集を中心にして / 「理
解から表現へ」の学習指導 現代文教材の場合 / 建礼
門院を中心とする「平家物語」の学習指導 / 「平家物
語」の運命観 知盛を中心にしての学習指導 / 平家物
語祇園精舎の段の学習指導 修士論文から / 徒然草の
「ことわり(理)」について その学習指導からの一考
察

あとがき

いずれの章にも、長年に渡り教育に携わってきた著者なら
ではの具体的な記述が見られ、本書の特色の一つをなしてい
る。教育職を志す大学生は勿論、既に教育職にある方々にとっ
ても有益な書であると思われる。

(平成十七年四月 榊梓書院 A5判 一八一頁 一、五〇
〇円)

中野三敏 校注

『近世畸人伝』

『近世畸人伝』の著者である伴蒿蹊（一七三三—一八一八）によれば、「畸人」とは常の道が行われなくなった世の中で、その常の道を我独りで行く人である。

当世の不徳無行を当然とする世相においては、仁義・忠孝の徳行の土こそ、「畸人」の範疇で扱えられるのではないかというのである。

近世期、その人間に寄せる興味の顕著な表明とも言うべき人物伝の流行は、高僧・偉人の伝に始まって次第にその幅を広げ、やがて狂者・畸人に至る。

寛政二年八月、『近世畸人伝』正編五卷五冊が刊行され、好評を得て、寛政十年春、続編五卷五冊が刊行された。今回底本として用いたのは正編の補訂本で、全体の構成は以下の通り。

畸人伝序

近世畸人伝題言

畸人伝巻之一 「中江藤樹」他十六人

畸人伝巻之二 「三宅尚斎并妻女」他二十一人

畸人伝巻之三 「隠士長流」他十八人

畸人伝巻之四 「柳沢淇園」他十八人

畸人伝巻之五 「並河天民」他十五人

畸人伝跋

もはや現代日本の若者にとっては遠い外国なみの存在となつた江戸時代の文化を、その精粹の部分において、僅かでも味わわせたいと心から思うとき、まずテキストとして選びたいのは、この『近世畸人伝』を、おいて他にはない。

西洋モデルとは違う江戸モデルの封建性を理解するにも、またもつとも江戸的成熟を示した十八世紀江戸文化の内実を探るにも、そしてさらには十八世紀近世思想界の動向を窺うにも、『近世畸人伝』は最適の書である。

（平成十七年五月 中央公論新社 三四四頁 一、四五 円）